

院内学級における台湾輔仁大学で日本語を学ぶ学生による異文化理解授業

山本裕一^{*1}, 楊錦昌^{*2}, 謝昀叡^{*3}, 小柳千佳子^{*4}

^{*1}北海道大学情報基盤センター, ^{*2}輔仁大学日本語文学系, ^{*3}北海道大学高等教育推進機構,

^{*4}札幌市立北辰中学校ひまわり分校

^{*1}Information Initiative Center, Hokkaido University

Email:sierra@iic.hokudai.ac.jp

あらまし：病院内に設置された院内学級は病気の子供達が入院しながら学習する教室であり、学習の遅れを解消することが主な目的である。また個々の病状に応じた入院や治療によって閉鎖的な状況に置かれる子供達にとって、外部との交流は回復への意欲を育む重要な要素となり得る。北大病院院内学級ひまわりでは外界との接触が困難な子供達が容易にコミュニケーションをとるためのツールとして双方向遠隔通信環境による遠隔教育を行っている。総合学習の一環として行う異文化理解授業を台湾で日本語を学ぶ学生と協調して行った。本稿ではその概要について報告する。

キーワード：院内学級、異文化交流、遠隔授業、初・中等教育実践

1. はじめに

2012年に国のがん対策推進基本計画が策定され、小児がんは重点的に取り組むべき課題の一つに位置づけられた。小児がん患者と家族が安心して適切な医療や支援を受けられる環境を整備することを目指し、2013年2月には全国15の「小児がん拠点病院」が指定された。北海道では北海道大学病院が指定され、地域の小児がん診療の中心的役割を担っている。2019年には整備指針が見直され、AYA（思春期・若年成人）世代の患者の医療・支援にも対応できることなどが指定要件に追加された。北大病院では小児・AYA世代がんセンターが設置され、単なる治療のみならず、病気療養中であっても他の健康な子どもたちと可能な限り同じ生活・教育環境の中で医療や支援を受けられるような環境を整備することを目指しており、院内学級や地域の学校との連携を目指している。

2 北大病院院内学級ひまわり分校

北大病院院内学級ひまわり分校は札幌市内の小中学校の分校という形式であるが、道内外から治療のため北大病院に入院している子供たちを受け入れている。毎年、小学生30名、中学20名程度受け入れている。第一義的な目的は長期や短期の入院のため生じる学習の遅れを少しでも解消することであるが、小児がん等の重篤な症状での入院や治療などで、

空間的にも心理的にも閉鎖的、抑圧的な状況に置かれやすい病気療養児の心理的な安定を図ることも大きな目的の一つである。そのために「気持ちの開放を図り、外に開かれた友人との交流を図る」ことは回復へ向けての意欲を育てることにつながる。北大病院院内学級ひまわりではテレビ会議システムやWeb会議システム、SNSなどを用いて国内外のさまざまな人々と異文化交流をはかっている[1]。

3 院内学級のネットワーク環境

北大病院では医療用LANの他に北大の学内LANであるHIENSが一部に敷設されており、1Fの院内学級教室でも利用することが可能である。教室内のPCやiPad、TV会議システム、ネットワーク機器はHINESに接続されており、児童はこれらの機器を通じてインターネットに接続し調べ学習や、国内外からの遠隔授業に参加するために使用できる。またHINESの他に札幌市教育ネットワークにも参加しており、札幌市教育委員会が提供しているネットワーク資源等にアクセスすることが出来る。2021年度にはコロナ禍をきっかけとし、無菌管理中の入院児童や感染症の蔓延等で小児病棟から教室に来られない児童の学習の機会を保障するために、学内LANであるHINESを小児病棟に延伸し、無線LANのアクセスポイントを小児病棟の無菌室2室、学生実習室、プレイルームに設置することとした。無菌室以外の児童は4,5名程度が入室可能な学生実習室、もし

くはプレイルームを利用する。ここではAPの他、高品質な映像、音声でのやり取りが可能なTV会議システムも設置したので、端末を利用しながら複数の児童が教室からの遠隔授業に参加することも可能である[2]。

4 複数の院内学級が参加する異文化学習

これまで我々は、総合学習の一環としてアラスカ大学、国立天文台ハワイ観測所、サウジアラビアキングサウド大学、北大北京オフィス、中国東北師範大学、ベトナム、マレーシア、台湾とテレビ会議システムで結んできた。「異文化理解・コミュニケーション、各教科の発展的補完の総合的な取り組みと位置づけるとともに、各教科の今後の学習の動機付けとなるべく授業を行ってきた。これらの海外からの遠隔授業は講師の都合等により定期的に行えないことや、授業を行えた場合でも病気療養児の容態により参加できる児童がわずかになってしまい、数少ない遠隔授業の機会を生かせない場合もあった。これまで主としてTV会議システムを利用してきたが、コロナ禍で急速に普及したZoomを利用することにより、大阪大学院内学級、関西医科大院内学級の他にも札幌市立山の手支援校、新潟県立柏崎支援学校、刀根山支援学校訪問部（ベッドサイド）の中で都合の合うサイトに参加してもらう事によって児童の不参加による授業の中止という事態を回避している。これまで機材や回線の問題で参加できなかったサイトの参加によりある程度年間計画を立てることができるようになった。今後は互いの教室で行われる異文化学習等で共有可能なものを増やしていければと考えている。

5 台湾輔仁大学日本語クラスによる授業

2023年11月に台湾輔仁大学で日本語を学ぶ学生、日本語文学系の科目「進階日語(advanced Japanese)」クラスの2年生に日本の院内学級の小中学生にさまざまな台湾文化について紹介する授業を行ってもらった。今回、日本側は北大ひまわり、柏崎特別支援学校の小中学生6名と後日録画を視聴する形で札幌市立山の手支援校の中学生が参加した。「進階日語」は通年4単位の科目で授業目標はいわゆる5技能を習得すること、日本や台湾の人文科学やさまざまな社会的トピックスを通して知識を深めること、自主

的な学習とチームワークを通じて学習効果を高めることが挙げられている。今回の遠隔授業では、33名の学生を4,5名の7組に分け、朝食の店、立冬の食べ物、台湾の寺院、夜市、文化地区など台湾に関するさまざまなトピックを紹介してもらった。授業時間は45分と限られていることから、リアルタイムで学生が話すのではなくあらかじめ4,5分程度の動画を作成してもらった。これにより学生側は緊張したり立ち往生することなく余裕を持って様々な表現方法でプレゼンすることが可能となった。この活動は「進階日語」の授業目標に合致するばかりでなく、日本語を学ぶ動機づけとして、日本の病気や障害と戦う子供に自分たちを知ってもらい、かつ子どもたちの異文化理解に資する事を狙っている。授業後に学生に回答してもらったアンケートより日本の入院児童と交流する今回の活動で、社会貢献や国際協力の意識を高めることやなどが確認できた。今回の授業の反省点としては接続トラブルにより日本側の質疑応答の時間があまり取れなかったことがあり、一部学生から不満点として挙げられ、次回以降の授業の進め方を考える必要がある。なお、日本側からは後日、児童生徒、教員からプレゼンの感想や、日本語の使い方などを台湾側の学生の日本語学習に資するようフィードバックしている。今後も台湾側の授業計画に沿って学生の日本語学習と院内学級の異文化理解学習の両者に貢献する活動ができればと考えている。

参考文献

- (1) 山本裕一、西堀ゆり、吉田徹、『掲示板型ツール「コラボード」と「コラボード広場」による院内学級での協調学習—院内学級での遠隔協調学習におけるシステム構築—』、教育システム情報学会第29回全国大会講演論文集、55-56(2004)
- (2) 山本裕一、井口晶裕、島田貴弘、小柳千佳子「小児病棟への学びのための高速ネットワークの導入について」、『大学ICT推進協議会2020年度年次大会論文集』FB1-4、296-297(2020)
- (3) 山本裕一、佐藤修、小柳千佳子、濱田和、佐藤聖子、西牧謙吾「TV会議システム、モバイル機器を利用した複数の院内学級による台湾に関する異文化理解授業」、『教育システム情報学会第44回全国大会講演論文集』、F6-2、437-438(2019)